



東京・春・音楽祭 2026 SPRING FESTIVAL IN TOKYO

シューベルト《白鳥の歌》より

《白鳥の歌》は、作曲家の死後、出版商のハスリンガーによって編集・発表された。《美しき水車屋の娘》《冬の旅》とともに、シューベルトの「三大歌曲集」に数えられる。3人の詩人の詩に付曲した14の歌からなるが、その内訳は、レルシュタープの詩が7曲、ハイネの詩が6曲、そしてザイドルの詩が1曲。本公演では、ザイドルが作詩した「第14曲 鳩の便り」以外の13曲が取り上げられる。以下では、プログラムに沿って各曲を簡単に紹介する。

「第7曲 別れ」は、街に、恋人に、星に……この世のすべてに「Ade! (さらば!)」と明るく別れを告げる。「第4曲 セレナーデ」は、お馴染みのメロディに乗せて「君を呼ぶナイチンゲールの声が聞こえないのか?」とささやく。「第1曲 愛の便り」は、ピアノが瀬音を描写するなか、「僕はすぐに帰るから」と、家路を急ぐ想いを小川に託す。「第6曲 遠い国で」では、世捨て人の絶望が吐露される。「第5曲 わが宿」は、荒涼とした心象風景を猛々しく歌う。「第2曲 戦士の予感」は「いつかまた会えるから、君も安心してお休み」と、戦場であって恋人を夢想する。「第3曲 春のあこがれ」は、春を求めて涙を流しながらさすらう。「君こそは春」と、切ない。「第10曲 漁夫の娘」は「こっちへおいで」と漁師の娘を誘惑する。本曲集では例外的に軽妙な曲。「第12曲 海辺で」は「哀れな女が涙に毒を盛った」と、やつれた男が嘆く。「第11曲 都会」は、別れの場面。ヴェニスを想わせる街を小舟に乗って進む。「第13曲 影法師」は、かつての恋人の家の前でドッベルゲンガーを見た「私」に戦慄が走る。「第9曲 彼女の絵姿」は「もう君に会えないなんて!」と、未練にひたる男の嘆き。「第8曲 アトラス」は、世の不条理をギリシア神話の巨人神アトラスになぞらえて歌う。全世界の不幸を背負った身は、怒りと悲しみに震える。

シューベルトの歌曲

「憂い」は、美しい森や野原の風景に癒やされながらも、生命の儚さに思いを馳せ、胸を締めつける憂いを歌う。厳かな和音の響きが、自然の美しさと無常の哀しみを対比させ、深い余韻を残す。

「秋」は、秋風の音を模写したピアノに乗せて、枯れゆく自然に自身の孤独を重ね合わせる。シューベルト最晩年の寂寥感と凍てつくような美しさが聴き手に迫る。「それらがここにいたことは」では、残り香や涙の跡にかつて愛した人の面影を見る。浮遊感のある和声で、儚い気配や遠い記憶を表現している。「春に」では、明るい春の陽光のなか、失った愛の悲しみを吐露する。しかし、曲調は決して暗くなく、訥々と思い出を語る。「わが心に」は、激しく脈打つピアノに煽られながらも、自らの心に「静まれ!」と諭す。焦燥感に満ちたリズムがやり場のない思いをドラマティックに描き出す。「私はあらゆる安らぎから離された」と歌い出す「深い悩み」は、絶望的な孤独を吐露する。心の奥底の悲しみが、重苦しい短調の響きで表現される。「ヴィルデマンの丘をこえて」では、風が吹き荒れるモミの丘陵を、野性的なエネルギーを発しながら傷ついた旅人が駆け抜けていく。